Arca：身体なき生物学からのノイズ

Aldo Poblete Varas
2026年11月24日

パラメータの外、なおも見知らぬ地形の地平の内側に。鉱物の緑、死んだ褐色、私たちをつけ狙う悪の帝国を見下す原初の地層。私たちはすでにシリコンの自然、技術世界のまぎれもない新しさなのだから。変性したキットラー。機械が新たな確かさをつくり出す実験室の、どこか失われた場所から救い出された、ちぐはぐな素材とリビドーの汚辱のフィクションが、ある文明の夢が腐る池を漂う。その奇妙な夢のなかで、身体は自らに作用する。アルカが到来するのは、この時間の終わりがあまりに早く告げられたあとだ。疲弊した前奏曲の旋律。何も定着しなくなるまで下地を塗られたカンヴァス。準備が一次的な実行に取って代わる。通過が道になる。動詞は利潤の外へ踏み出し、喧噪と、とうに鮮度を失ったトランスヒューマニズムの勝利宣言へと還元される。

私たちはそれを明言し、自らの貴族的な罪を赦す。そのあいだに人間の条件の密度は、ひそかにその姿を歪めてゆく。人間的なものは奇妙なアリバイの収斂となり、数と生の物質と情動に支配された現実のなかに展開する。私たちは都合のよさから、そしてかつて海を呼び寄せた文化の諸形式へのまったくの倦怠から、その情動を呑み込む。アルカを通じて、その倦怠に亀裂が入る。闇は生命の液体と化し、飼いならされた感覚性を破壊する。ここでは闇が聖なる雨となって地から立ちのぼる。自らを投機の対象とする社会の迷宮に背を向けて、なお立ち尽くすものを砕きうる暗がり。音を生成するアルゴリズムを吐き出しながら漂うドラムマシンとシンセサイザーの上に、資本と神秘のせん妄が浮かぶ。ピッチを変えられた声の亀裂と崩れ落ちる金属的なパーカッションの下で、すべては生命を支え、接続を可能にするLCLに浸ったままだ。ケーブルは脊髄に直接入り込み、臓器が、あるいはその残りが露出するまで胴体をこじ開ける。

これは冷たく、周到な志向性の音楽だ。剥き出しの臓器の恍惚へ向かうエクストロピア的な衝動の厳密な機構を前にした、祭司めいた溜息。限界のルシファー的な操作。こうした思弁の洞窟の入口で、救済と批評は剥がれ落ちる。内部では、音楽と時間が無限小解析のうちに、そして全面的な破裂を待つコンピューターの筐体のなかに消えてゆく。現代美術が礼儀正しく身を引き、みずからの実存の力を撤収できるような、またひとつの代理紛争ではない。その敷居からのみ、この部屋のさまざまな黒を説明できる。艶のある黒。犯罪の普遍史が刻み込まれた領域を覆う万華鏡のような異星の質感に養われる、許された夢の図書館。『*Mutant*』から『*Kick*』の連作全体に至るまで、これは身体の音楽だ。閉じ込められていることが狂乱の詩に、過負荷の感覚どうしの熱に浮かされた対話に変わる。

アルカの音楽では、知性に対して陰謀をめぐらす邪悪な生物学と、文字と概念のなかで自らをつくり直すことを拒む幻影の力の残滓とのあいだを、断層線が走る。せん妄はすでに純粋なデジタルのダイアグラムだ。どの有機体も、自動的な再生産に特化した生物学的残滓であると同時に、もっとも不吉な機械の幻視が生み出す清算の蜃気楼そのものだ。それはピクセルから血を流す病を、周縁の幻想を、そしてある地形に係留された主体たちの法医学的な光景を通過する。そこでは威信と生物学が背を向けて待ち、幕まで引きずられる用意ができている。そこでは、コンクリートが自壊しないかぎり、葬送の遺骸は安らげない。響きは後退し、身体の残骸の見世物への全面的な従属だけが残る。チップのなかに閉じ込められた、磁気を帯びた赤い月のように。そのランウェイを、ガリアーノはまだ通り抜けられる。黒曜石の仮面を、それを収めるために造られた部屋のなかに封じたままにして。

統辞連鎖の縁に立つアルカ。始まりの時代のための宗教。時間の起源から湧き出た粘りつくノイズが、今日、沸きこぼれるために凝固している。